NHK アカデミア 第 20 回<海軍史研究家･大和ミュージアム館長 戸高一成>

戸高一成(とだか かずしげ)：海軍史研究家。日本海軍が威信をかけて建造した世界最大の巨大戦艦「大和」は、その能力を発揮することなく悲劇的な最後を遂げた。その姿を今に伝える「大和ミュージアム」の館長を務める。

こんにちは、戸高一成です。広島県呉市にある博物館「大和ミュージアム」の館長をしています。同時に、長いこと、日本の海軍を通して日本の歴史の勉強をしています。

今日はたくさんの方がこの講義に参加してくださっていてお話しできるということで、いろいろな質問にも答えたいと思っています。

<リモートツアー 大和ミュージアム>

まず、大和ミュージアムについて少しお話しします。当館は、開館以来、年間平均で約 100 万人の来館者を迎えている博物館です。今日はせっかくなので、“リモートツアー”という形で、大和ミュージアムの中を皆さんに見ていただけるといいなと思って準備しております。

大和ミュージアムは、広島県の呉市にあります。呉は瀬戸内海に面して、前は島々、後ろは山に囲まれ、外部から攻めにくいということもあって、軍艦をつくる「海軍工廠(かいぐんこうしょう)」が置かれました(上画像)。その海軍工廠で戦艦大和もつくられたわけです。

大和ミュージアムの館内に入ってまず目に入るのが、当館のシンボルである実物の 10 分の 1 につくられた戦艦大和です(上画像)。これは細部まで気持ちを入れてきちんとつくったもので、模型としても世界的に立派な作品だと自信を持っております。

1 階から 3 階まで中央の吹き抜けのところにあって、戦艦大和の周囲を全部見ることができます。前に砲塔が 2 基、後ろに 1 基あります。こういったものが大和の一つの中心部です。

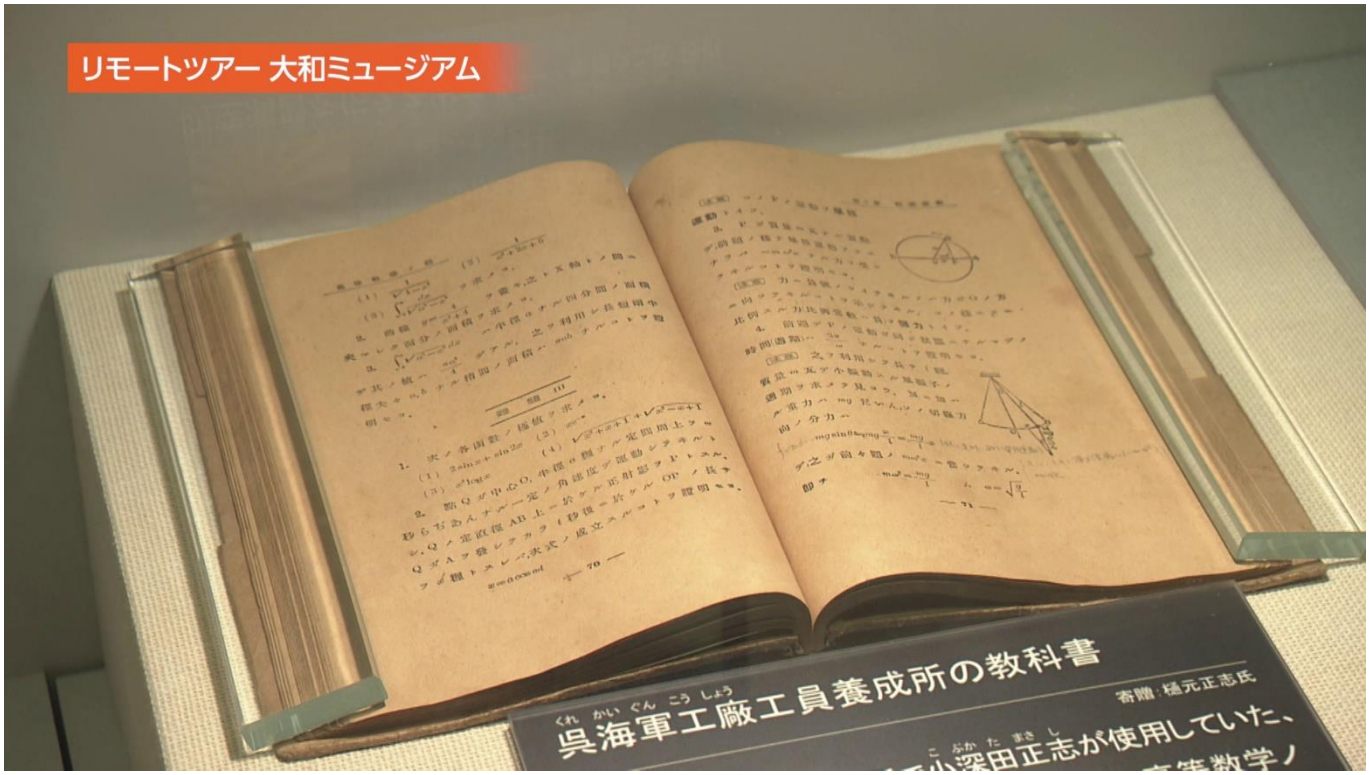
「46 センチ主砲」。これは船に載せられた砲としては世界最大、歴史上最大の大砲です。

また、艦首の部分は「バルバス・バウ」といって、艦首の下が丸く突出しています。これによって、起こる波と水面で起こる波とがそれぞれが打ち消し合って、水の抵抗が非常に小さくなる。非常に燃費のいい、スピードの出る船型になっています。

3 階の通路に上がりますと、下から大体 10 メートルの高さになります(上画像)。この戦艦大和は 10 分の 1 の大きさでつくられたものですから、ちょうど 100 メートルの高さから見たような感じで見えるわけです。「飛行機から見たら、こんな感じだったのかな」と見ることができます。

実際、本当の造船所でつくりまして、船としてもきちんとしたつくり方をしています。ですから、実際の船の縮小版というふうに考えていいと思います。これを約 2 年という期間で完成させたんですけれども、その史料は戦後長い間研究された成果を生かしたものですから、私から見ると数十年の努力の結果だというふうに思っています。

次に展示コーナーです。私が一番見てほしいのが、この「ワシントン海軍軍縮条約」のコーナーで、戦艦をつくらなかった時代の展示です。「戦艦をつくらない」という条約の中で、日本の海軍は「それでもつくる力を失ってはいけない」ということで、教育に非常に力を入れるんですね。



「軍艦はつくらないけれど、つくれる力を持っていなければいけない」という考えで、条約下で戦艦をつくらない時代に非常に力を込めて教育した様子が、多くの史料で残されています。

当時すでに使われていたリミットゲージであるとか、残っているいろいろな工具類がきちんと展示されています。こういう教育があって初めて、十分な船をつくる力というものができてくるんです。

大和の海底調査のときに引き揚げられたものが一部展示されています(上画像)。お風呂のタイルや食器、ビール瓶といったもので、この戦艦の中で「人が暮らしていた」ということが伝わると思います。

大和はすばらしい船でしたけれども、昭和 20(1945)年 4 月 7 日、最後は無残な沈没を遂げて多くの方が亡くなっています。

これは大和の関係者や乗組員などの写真と遺書などを集めたコーナーです(上画像)。ここには、大和で戦死した 3000 人近い方のお名前すべてを掲げてあります。大和ミュージアムとしては、やはり「過去の歴史をきちんと見て、そして知って、自分で考えてもらいたい」。日本人がどういう努力をしたのか、どういう失敗をしたのか。その両方を見て、初めて自分としての考えがまとまるのではないかなというふうに思っています。

技術というのは、人間を幸せにするために開発するんですけれども、使い方を誤れば悲劇も生むものです。ただただ、技術が進めばすばらしいというものではない。それを扱う人間の方に、もっと大きな責任があるんだということを知ってもらいたいですね。

<戸高さんが読み解く“戦艦大和”>

第２次世界大戦後、戦艦をつくる国はなくなったわけですから、戦艦大和は未来永劫(えいごう)、世界一の戦艦であるということが確定しているという非常に珍しいものです。私にとっての戦艦大和というのはいろいろあるんですけれど、軍艦や海軍というのは本来どういうもののためにつくられたのかということを考えたときに、やはり国を守るということもありますけれども、立派な軍艦を持っている、強そうな艦隊を持っているということで、武力衝突を他の国と行わないためのいわゆる“抑止力”として存在しているんです。これは昔も今も基本的には一緒です。

そういう意味では、戦艦大和というのは、何事もない平和な時代を二十数年送ってスクラップになるのが一番戦艦として幸せな一生なんですね。ところが、戦艦大和が竣工(しゅんこう)したとき、１週間ほど前に太平洋戦争が始まっていたということで、なかなか難しい時代に生まれた戦艦になったわけです。軍艦というのは抑止力としてつくりますけれども、実際に使われるときには能力を発揮するという前提なんです。ところが、大和というのはなかなか上手に使われなかったために、ほとんど能力を発揮することなく沈んでしまった“悲劇の船”だというふうに思っています。

<Q＆A パート①>

はるさん「大和が艦首から前のめりに沈没してしまったのか、横向きに倒れるように沈没してしまったのかを教えてください」

戸髙さん「大和は最後の出撃のときにアメリカ軍の攻撃を受けて、左側に転覆して沈みました。そして沈んでいる途中に艦内で爆発が起きたために、3つに割れてしまったんです。ですから、海底では大きく3つにバラバラになった状態で沈んでいます」

はるさん「ありがとうございました。夏休みに呉に行くから、聞いてみました」

戸髙さん「はい、ぜひ来てください」

趣さん「私は今大学で学芸員になるための勉強をしています。大和ミュージアムの学芸員さんは、どのような専門の方がいらっしゃるんでしょうか」

戸髙さん「学芸員の勉強というのは、本当に幅が広いんですね。ですから、大和ミュージアムにいる学芸員さんもいろいろな勉強をした人がいます。近世史であるとか、それから技術の勉強をした人もいます。やはり学芸員の基本というのは標準的な博物館の史料管理のノウハウなどを勉強して、あと大切なのは勤めた博物館の目的に沿った勉強を一生懸命することでしょうね。例えば、図書館の司書さんの仕事は日本中、日本十進分類法で仕事をしますけれど、博物館に関していうと、日本中の博物館が全部違うわけです。同じ学芸員の勉強をしても、行った先が古代史を扱う博物館なのか、土器とかそういうものを扱う博物館なのか、江戸時代を扱う博物館なのかでみんな違います。やはり勤めた先、また逆に自分の好きな時代の博物館にできるだけ勤められるよう努力するということが大切で、勤めたあとの勉強の方が重要だと思います。基本的な学芸員としての勉強はきちんとした上で、どんなところで勉強をしたいか、仕事をしたいかという“自分の気持ち”をきちんと持って進むのが大事だと思います」

趣さん「私は今大学で日本近代史の勉強をしていて、小学生の頃から海軍の木村昌福さん(太平洋戦争で奇跡の作戦と言われた「キスカ島撤退作戦」を指揮)がすごく好きでずっと本を読んだりしていたので、できることならぜひ働きたいです」

戸髙さん「それはいいですね。勉強してください。厳しく、勉強してください(笑)！」

おむさん「“戦争”という単語を聞いた時に、単純に『戦争はいけない。平和にしなければいけない』というところだけで話が終わっていて、それ以上の深掘りは自分の中ではあまりできていないというふうに思いながら伺っていました。そういう中で、博物館や教育というところについて、今後どのようにしていかなければいけないか、どのようにしていこうと考えてらっしゃるか、教えていただいてもいいでしょうか」

戸高さん「大和ミュージアムは特に“平和の問題”について、わりあい重く考えています。私は、博物館、例えば大和ミュージアムを一回見て『わかった』と思ってほしくないんです。というのは、博物館の中で何を知ることができるかというと、100 字とか 200 字の短い文字で書かれた説明が並んでいるに過ぎないんですね。それぐらいで、物事を『わかった』と思われたら、こちらは思わず『違いますよ。そうじゃないですよ』と言わないといけない。

私たちが博物館で何ができるかというのを考えた時に、まず歴史的な事実とエピソードを見ていただいて『例えば 80 年前 90 年前にこんなことがあったんだ。もっと知りたいな』という気持ちを刺激して、興味を持ってもらうということが、博物館の仕事だと思うんです。私は、大和ミュージアムに入って最初に大きな戦艦大和の模型を見てもらって、『おっ』と言って驚いてもらうのがいいんだと思っているんですけれども、ミュージアムがオープンしたときに、軍隊にいたようなお年の方が『館長さん、戦艦大和は格好いい。そういうような展示でいいんでしょうか？』と言ってくれたんですね。私は『いいんです』と言いました。戦艦大和が格好いいと思うから興味を持って勉強する。そうすると格好いいだけじゃないところへたどりつくことができる。『こんなものは勉強してもいけない、もう知ってもいけない、戦争のことなんか何も知らなくていい、平和だけは大事なんだ』というふうに押さえたら、本当のところへたどりつけないんですね。やはり、自分でどんどん知りたいという気持ちをかき立てるものが必要なんです。今まで戦後の平和教育の中で、わりあいそれが欠けているんです。戦争のことや軍事的なことを教えないことが平和教育だと思われていた時期が長いんですけれども、実は違うんです。何でも知って、いいことも悪いことも知って、初めて事実にたどりつく。やはり“無知”はダメです。『知った上で否定する、知った上で肯定する』。それが大切だと思います」

<海軍史研究家への道のり>

ここで、私がなぜ海軍について勉強するようになったのか、少し私自身のことを話しておきたいと思います。よく“海軍史研究家”と紹介されるんですけれども、私自身は研究家だとは思っていないんです。私自身は何かと言えば、博物館の管理者であり、文献をつかさどる司書であると思っています。どういうことかというと、研究者の支援をする、研究者のお手伝いをする仕事だと考えています。

私自身は小さい時から、船や本、歴史、美術、天体･･･星も大好きでした。ところが、全般的に勉強が好きということではなくて、好きな勉強はとことん勉強して面白くて止められないぐらい勉強するんですけれど、興味のない科目は全然やらないんですね。ですから非常に成績にばらつきがあって、中学高校あたりで先生が将来を案じてくれるような状態だったんです。だからトータルとして成績は良くないんです。先生に一度呼ばれて「こんな成績では行ける大学はないよ」と言われたんですけれど、私は「数学や英語ができなくても行ける大学はあるぞ」と、私の大好きな美術大学なら大丈夫ということで、勉強して多摩美術大学へ行きました。

私が本当にうれしかったのは、美術の教育というのは、その人の“心”を伸ばす教育なんです。自分自身を磨く教育を徹底して受けることができたために、非常に楽しい大学生活を送ることができました。そして、彫刻科を出たんですが、彫刻というのは“求人がないのが自慢の学科”なわけです。ですから仕事としては成り立たないので、芸大のデザイン科を出た浪人時代からの友達とデザイン会社をつくりました。

そのデザイン会社で5年間やっていたんですけれども、先ほど言ったように、私は自分の考えを表現する作品をつくりたいんですけれど、デザインというのはまた違って、スポンサーが望むものを代わってプロとしてつくるという仕事なんです。両方とも必要な仕事だと思うんだけれど、私は体質的にデザイナーではないなと思

って5年程で辞めて、アルバイトをしながら暮らせばいいやと思っていたんです。そのときちょうど時間ができたので、別の大学で図書館の講座を受けて、図書館司書の資格を取るための勉強をする時間を得たわけです。

大学時代から、私は「知りたいことがあったら、知っている人に聞けばいい」というシンプルな考え方で、それこそ戦艦大和のことを知りたかったら、戦艦大和を設計した人に聞けばいい。それができる時代だったわけですけれどね･･･。そういうことで、海軍関係の人に接触する機会をたくさん持ったんです。そういうことが縁となって、財団法人史料調査会という海軍の史料研究をしている団体に史料を見せてもらいによく通っていたんです。ウィークデーでも本を見せてもらいに行く若い私を見て、よほど暇人だと思われたらしく、そこの会長さんに(その方も連合艦隊参謀でしたけれども)「君、うちを手伝ってくれ」と言われ、そこへ勤めるようになりました。

そこの上司だった土肥一夫さん、山本五十六長官の参謀だったような人が、毎日自分で車を運転して出勤する、まだそういう時代でした。私は、上司も連合艦隊参謀、会長も連合艦隊参謀というような環境の中で、史料の整理をして、研究者が来た時のお手伝いなどをしていたわけです。そういう中で、呉市から何度も人が来て、海軍の史料を一生懸命集めているんですね。聞いてみたら、呉市で将来、海軍工廠(かいぐんこうしょう)と軍艦建造に関わる博物館をつくるために史料を集めているということで、それはすばらしい計画だと、頑張ってくださいと話すことがありました。

その後、いろんな作家さん、例えば半藤一利さんや澤地久枝さん、吉村昭さんたちが、海軍のものを書く時に私のところに史料の相談に来たものですから、いろんな方と接触するご縁を得たわけです。その中でしばらくしてから、「厚生省(現在の厚生労働省)で、昭和期の国民生活、特に戦時下で苦労した国民生活の史料を残す博物館をつくりたいので手伝ってほしい」という話がありました。私は理事会を通して「そちらに行きなさい」ということで移籍してつくったのが、九段下にある「昭和館」という博物館です。オープン後、私が図書情報部長というのをやっている時、昔から来ていた呉市の人が来て「呉市でつくろうと思っていた博物館が具体化してきたので、手伝ってくれないか」と言われたんです。「さてどうしよう」と思っていたら、呉市から市長さんが来て、直接「館長として来てくれ」と言われて、「そういうことなら全力を尽くしましょう」ということで、呉市に行ったわけです。

考えてみると、私というのは最初から最後まで、人の調査のお手伝いをする、研究のお手伝いをする、博物館のお手伝いをするということでずっと仕事がつながっているんです。思い起こすと、私は“就職試験”というものを受けたことが一度もないんですね。仕事がたまたまあったせいもあるんですけれど、本当は受けたら落ちるだろうと、受けて落ちるのは嫌なので受けなかったというのもあります(笑)。ただ、頑張れば人間は生きていける、また自分の好きな勉強をすることはできるんだというふうに思っていましたので、頑張れたのが良かったなということですね。

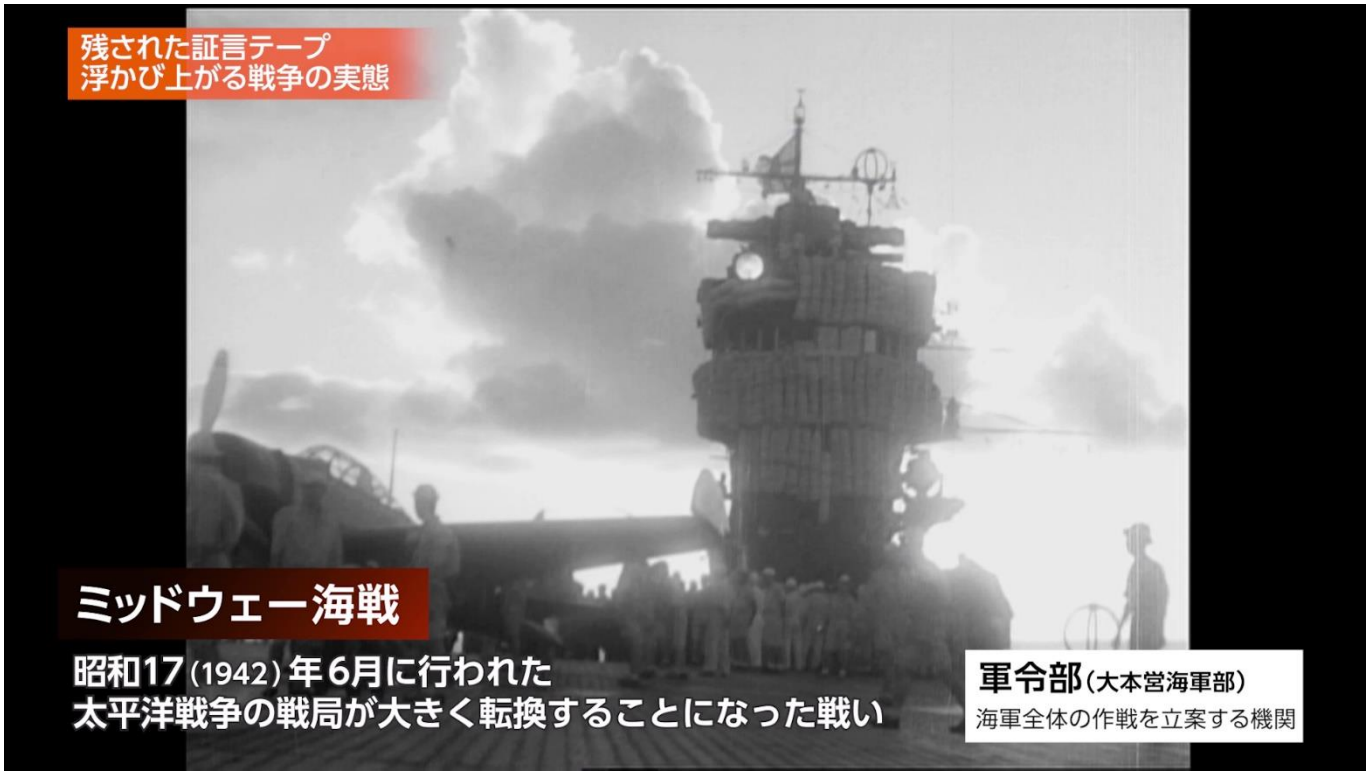
<残された証言テープ 浮かび上がる戦争の実態>

私自身、若いころからずっと海軍の歴史に興味があって勉強してきたんですけれども、私が勤めた財団法人史料調査会という海軍の歴史を専門に扱っていた史料館にいた時、旧日本海軍の将校たちが「自分たちの反省を、後世に伝えよう」と開いた研究会があるんです。「海軍反省会」という名前でやりました。その反省会は 131 回やったんですけれども、記録のためにとっておいたテープ、私がずっと保管するように頼まれていたものを持ってきました。

このテープです。最近はもうあまり見ることがないと思うんですけれども、これは本当に便利で、昔は“音声記録”というと、まずカセットテープということでよく使われました。1 本 2 時間のテープを、毎回 1 本ない

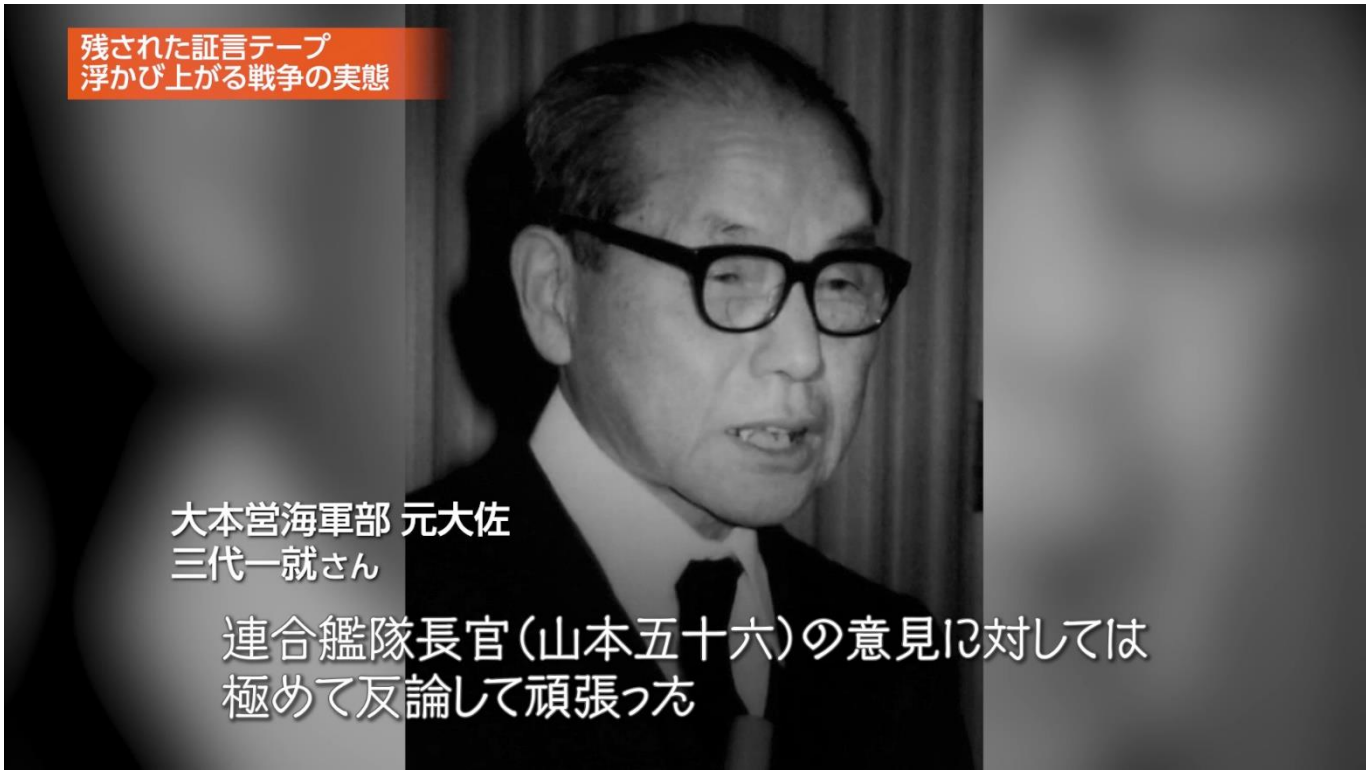
し 2 本録音していまして、これが全部で 400 時間分 200 本ぐらい残されたんです。実際はもっとたくさんあったんですけれども途中で失われたものもあって、現在残っているのが 200 本 400 時間分なんです。この記録が世の中にきちんと残らないといけないということで、私は 10 年間かけて全部を書き起こして、文字にして本にまとめました。これは大変地味な、読んでいて面白いということはないんですけれども、やはり歴史の貴重な記録だと考えています。

一部を持ってきましたので、皆さんにちょっと聞いていただきたいと思います。



まずミッドウェー海戦の時、日本の連合艦隊、山本五十六さんの連合艦隊と、海軍の軍令部、これは海軍の参謀本部のようなものですけれども、この意見がお互いにぶつかったんですね。軍令部は、ミッドウェー作戦は危険だしまだ必要がないからやめた方がいいというのに、山本五十六さんの連合艦隊は、ぜひやりたいということで衝突して、結局ミッドウェー海戦は強行されて大敗北するんです。

それに関した音声を聞いてください。

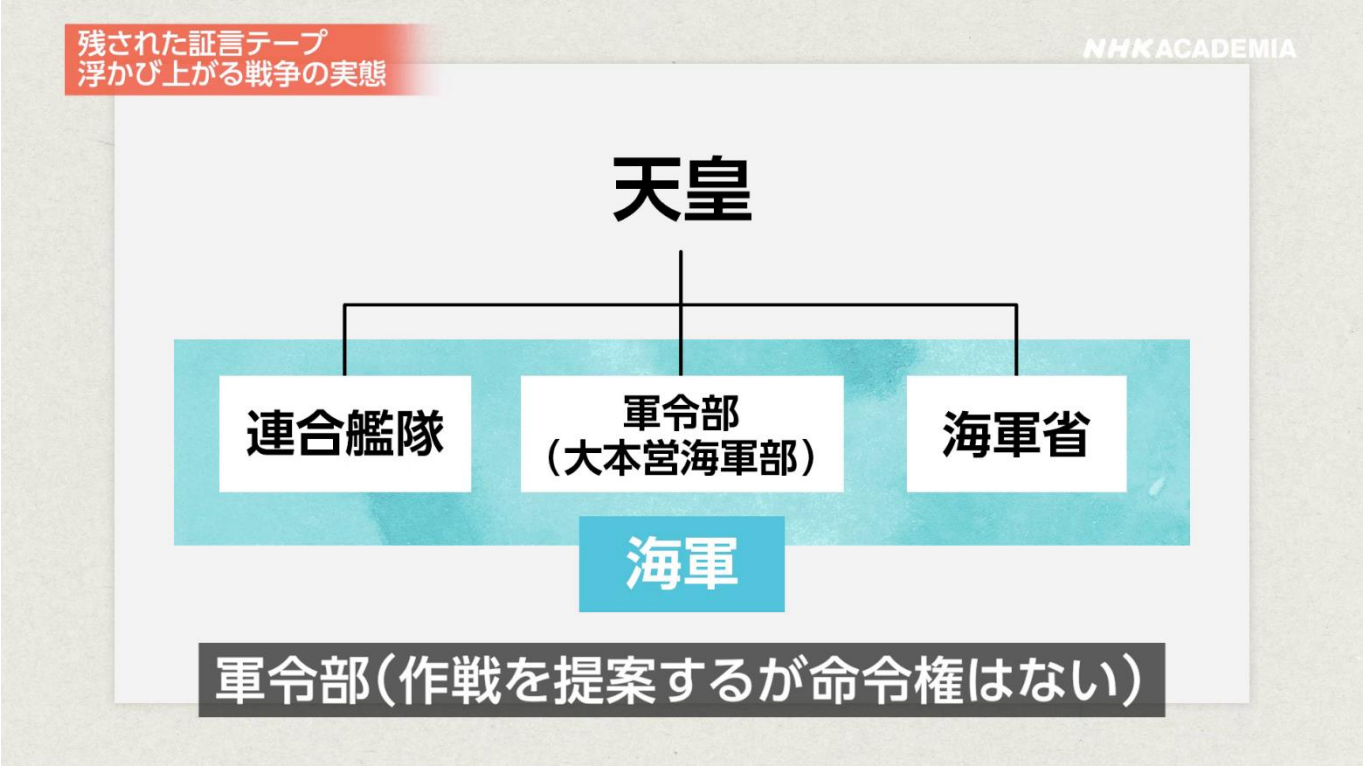


※映像（開始点 26 分 10 秒）とあわせてご覧ください。

大本営海軍部 元大佐 三代一就さん「連合艦隊長官(山本五十六)の意見に対しては、極めて反論して頑張った。総長(永野修身海軍大将)が『山本がそう言うなら、やらせてみようじゃないか』と、(ミッドウェー作戦を)決めちゃったんですよ。真珠湾作戦が成功したもんですから。『そうか、それじゃ山本にやらせてみよう』ということで決めちまったと。極めて残念なことだと思うんですが、わしなんかそれでもって、泣いちゃったんですよ。こりゃダメだと。ミッドウェー作戦やったら大変だということで、わしは泣いちゃった」

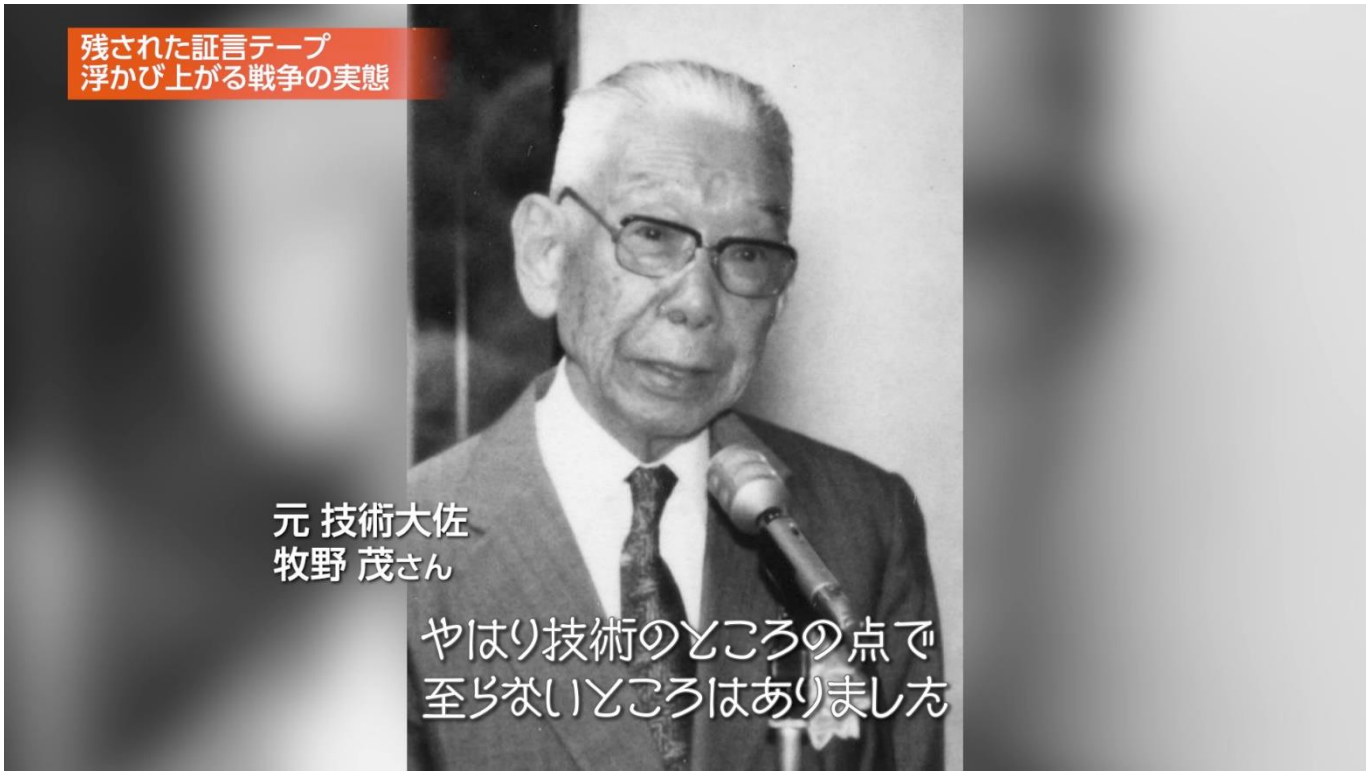
三代さんは、ミッドウェー作戦をやるという話が出た時に「絶対にこれは反対だ」と。軍令部全体が反対していたのに、やはり山本さんの真珠湾作戦を成功させたということに負けて、実行されたんですね。ですから、記録としては「軍令部は反対だったけれど負けた」というだけのことが残るんですけれども、実際の人たちがどんなふうに思っていたのか、「残念で泣いてしまうほど悔しい、自分たちはそういう気持ちだった」ということが、活字の記録ではなかなか残っていないんです。こういう音声記録では、当事者の感情が残る。そういうところに、この記録の大切さがあるのではないでしょうか。

ミッドウェー作戦というのは本当に危険だというばかりではなくて、将来の作戦の傾向を考えても、ミッドウェーをとると、あとで補給ができるのかとか、ミッドウェーを攻撃したらアメリカの空母が出てきて、それを一網打尽にできるのかとか、日本側の都合のいいようなことだけを考えたような不確定の要素の多い作戦だったんです。だからこそ頑張って反対したんだけれども、残念だったなということですね。これがいわゆる“オーラルヒストリー(口述歴史)”。文献ではわからない音声、生の言葉で残る歴史史料の大切なところだと思っています。



そして一つ大きな問題は、軍令部(軍令部というのは参謀本部海軍部ですから非常に重要な部署ですね)、そこが反対しているのに、連合艦隊はその指示に従わなくてもよかったのか、命令に反しているのではないかと思う人もいると思うんですけれども、そうではないんですね。これは日本の海軍の制度上の不備というか混乱が、これを許可しているわけです。ちょっと簡単ですけれど、図(上画像)を見てもらうと、連合艦隊と軍令部(大本営海軍部)ですね、これは天皇から直接指揮権を受けている別部署で、同列なんです。そしていわゆる“軍令”といって、天皇陛下の兵隊を動かす、海軍を動かす命令というのは、連合艦隊が直接受けるんですね。では、参謀本部・軍令部は何をするのかというと、天皇のアドバイザーというか、作戦計画を練って、天皇に提案するという部署であって、命令権はないんです。ですから、作戦を実行し艦隊を動かす権限は、連合艦隊にある。ところが、その作戦を起案したり、それを伝えたりする部署は軍令部である。大変混乱するんです。現場から上を見ると、命令権者が二人いるような形になるんです。ですから、本当に日本の海軍の作戦を遂行するに当たって、この軍令部と連合艦隊の関係というのは意見が一致している時には非常にいいんですけれども、意見が分かれた時には混乱するんです。

連合艦隊司令長官の山本五十六さんというのは、本当に立派な長官で魅力的な人で、絶大なカリスマ性を持った人だったんです。人間も本当に真面目な人で、お酒も飲まない人だったんですけれども、真珠湾攻撃以降、それ以前から大変人気があって、わりあい自分の考えを押し通せる立場だったために、軍令部との協調性においてやや欠けているところがあって、自分の考えを主に強行したというところがあったようです。連合艦隊の幕僚も、もうイケイケという感じで、真珠湾は勝ったし行けばどこでも勝てるんだという思い上がった気持ちで作戦を推し進めようとしたために、つまずいたということもあるような作戦だったんです。



※映像（開始点 31 分 57 秒）とあわせてご覧ください。

次に、戦艦大和、これはどんな船であったかということで、設計主任だった牧野茂さん、技術大佐ですけれど、この人の証言もあるので聞いてください。重要な証言ですけれども、甚だ音声が悪いので、音を聞きながら字幕を読んでください。

元 技術大佐 牧野茂さん「やはり技術のところの点で至らないところはありました。船体(戦艦大和)の構造を薄くしてと、これくらいは大丈夫ということでやったことが、最終的には防御につながったんじゃないかということを私は考えていて、これも造船屋の造船学に対する認識の誤りがございまして、そうなったものです。考えが足りなかったということでもあります」

この人が戦艦大和の設計主任で、呉海軍工廠で大和をつくったんです。戦後、私は 20 年ぐらいいろいろとご指導いただいたんですけれども、戦艦大和はすばらしいということは、ずっとご当人は言わなかったです。大和の防御に特に不備があったと、自分の考えが至らなくて不十分な船になってしまったところがあるということを、最後まで反省していました。特に海軍の兵科の人たち、乗って戦ったような人たちには申し訳なかったという気持ちを亡くなるまで持っていました。

反省会のテープはなかなか録音状態が悪くて、私がぽつぽつと文字起こしする時には大変だったんだろうなというのも、少しわかっていただけるかなという情報でした。

今、ふたつを聞いてもらったところですけれど、オーラルヒストリーはご当人の声や感情がわかることによって、その人が怒りながらしゃべっているのか、喜びながらしゃべっているのか、誇りを持ってしゃべっているのか･･･そういったものを聞くことによって、その人のキャラクターを知ることができるので、文書･史料を読んだ時に、この人はこういう人だからこういうふうに書いているんだというようなことまで踏み込んで理解することができる貴重な史料だと思っています。

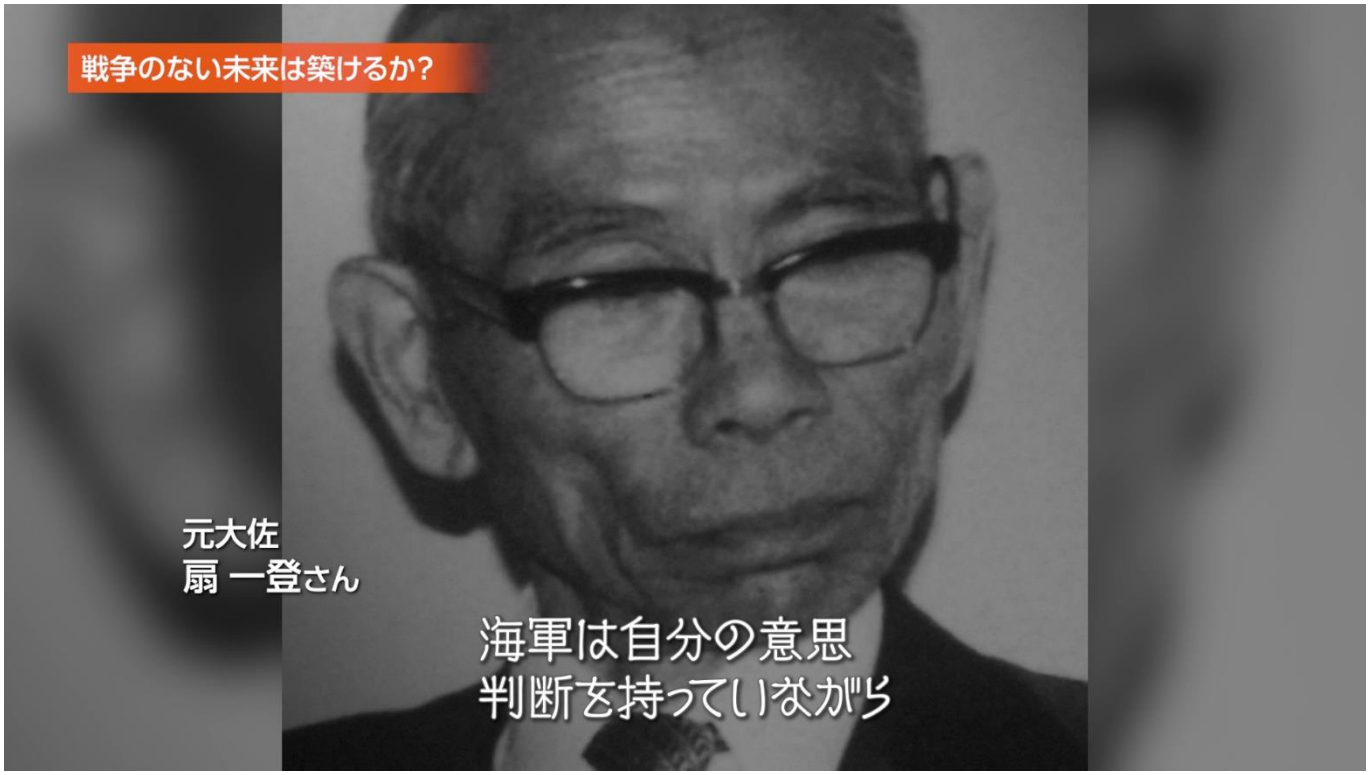
たくさんの史料がございますけれども、私は太平洋戦争というのは一体どういうものだったのか、そういうことを考えた時に、その貴重な歴史史料で、私たちがいつまでも勉強するべきだというふうに思っています。

<戦争のない未来は築けるか？>

戦争のない未来、戦争は一体なぜ起きるんだろう、なぜ人がそんな目に遭わないといけないのかと考えたこともあるので、これから戦争と平和についても、やはり考えないといけないと思っています。

人類は、戦争や紛争を１万回以上、歴史的に繰り返している。今も世界中で争いは絶えない。もうこんな戦争はないだろうと思われていたようなロシアによるウクライナ侵攻、こういったことが今でも起こるんですね。一体、人間は何を学んできたんだろうと思いますけれども、こういう戦争を見ていると、太平洋戦争、日米戦争、第２次世界大戦、そういったところに共通点があるのではないか、そしてまたどんなふうにその結末を考えることができるんだろうか、そういうことをも考えるようになります。これも「海軍反省会」の中に、そういうきっかけがあるのではないかなと思います。

海軍反省会のメンバーというのは中堅以上の人ですから、命じた側の人間なわけです。ですから、そういった人間の思い、戦後の思い、そういったものも音声として残っているものがあるので、聞いていただきたいと思います。



※映像（開始点 36 分 16 秒）とあわせてご覧ください。

元大佐 扇一登さん「海軍は自分の意思、判断を持っていながら、それはこちらに置いて、そうして流れて、海軍のこれは体質だと思うんですよ。だからこそ、思わぬ好まぬ自分の本意でない方向へ流されていった。誰かれと言わず、みんなそうですもん」

扇さんは非常に冷静な方で、客観的にものを考える人なんです。この人をもってしても、海軍で大きい流れに流れてしまうと、自分の意見と違っていても、もうこれに流されてしまう。そういう傾向があったということを言っているわけなんです。軍隊ですから、誰もかれもが思いどおりに発言してそのとおりになるわけではないです。でもきちんとした発言の場というのは、必ずあるんです。海軍は、物事が決定するまでは階級の上下にかかわらず、かなり自由な発言･意見が述べられたんです。でも一旦決まると、もう一切を忘れて、決まったことに従うという流れがありますので、もう少し何とか努力して止められるべきものは止められたのではないかという思いが、戦後に残っていたのだと思います。

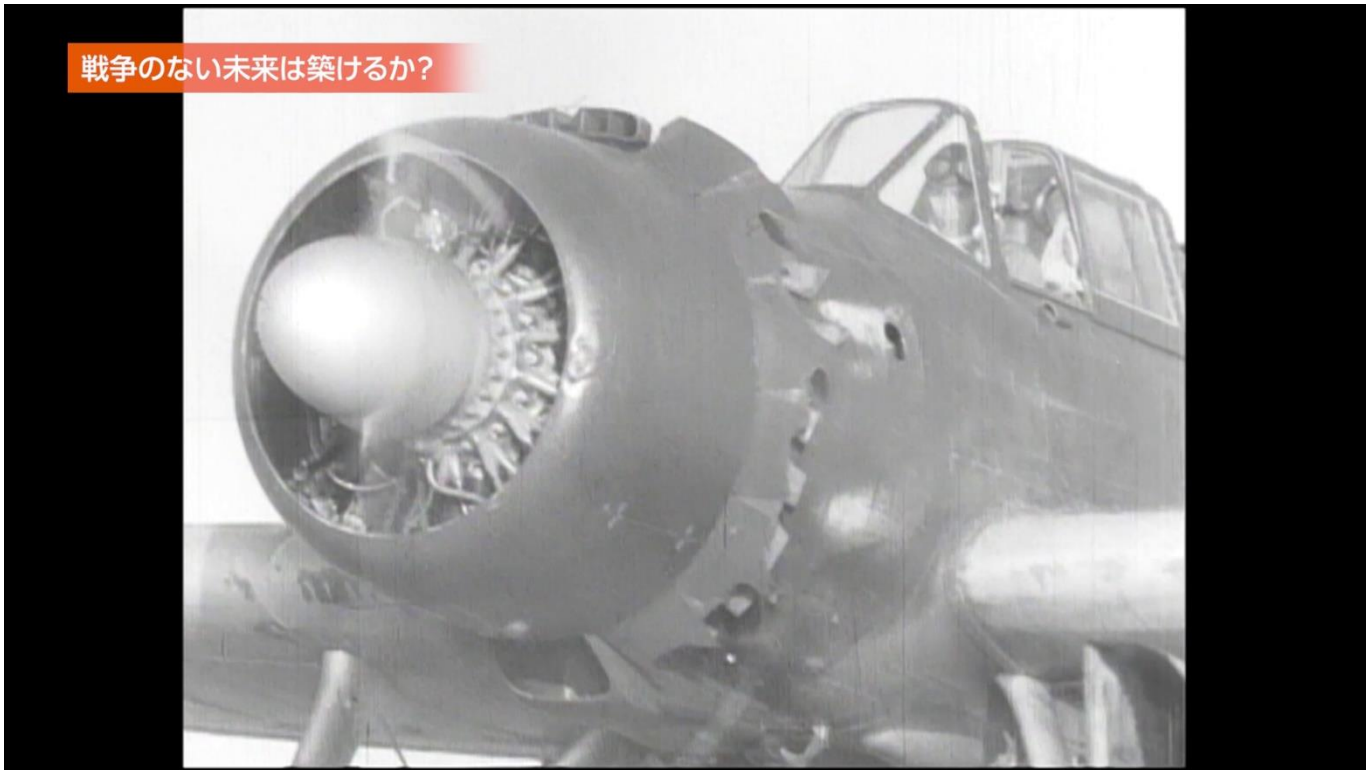
特に太平洋戦争で問題が大きいのは、「特攻」の問題だと私は思うんです。特攻に関する考え方も、反省会の中で度々取り上げられています。

※映像（開始点 37 分 58 秒）とあわせてご覧ください。

元中佐 鳥巣 建之助さん「私はね、特攻はね、これは邪道であり、やるべきじゃなかったと。もっと前に戦争をやめておれば、特攻なんてやらなくて済んだんです。特攻をね、やるようにしたということは、あくまで上の者の責任なんであって、戦争でね、特攻なんてやることは、これは駄目(だめ)なんだ。これをやって勝とうなんていうような考え方っていうのは、これはとんでもない話であって、私は大きな間違いであったと」

鳥巣さんは、潜水艦隊の参謀だった方です。この方は最初から、例えば「水中特攻」など、そういったものの作戦については否定的で、何度も会議などでは「こんなものをやっちゃいかん。使い物にならない」と一生懸命言うんですけれども、上から「しっかりやれ」と言われて、かわいそうなというか･･･運命なんですね。一番反対していたのに、特攻作戦を実施する側になるんです。ですから戦後、自分の気持ちの中で非常に苦しい思いをずっと抱えて過ごしてきて、そういう思いを海軍反省会の中でも非常に強い言葉で何度も何度も語っていらっしゃいます。

人間というのは、最後まで“考える”ということが大切なんですね。私はいつも思うんですけれど、人間は走って動物に負け、泳いで魚に負け、鳥のように飛ぶことはできない。生き物として、さほど強い生き物はではないと思うんです。地球上で。それがなぜ霊長類という形で、生物界の頂点に立てたのか。これは“考える”ことができ、そしてその考えを“伝える”ことができるという決定的な力があって、初めて他の強い動物の中で生き残れたんだと思うんです。人間は考えることをやめたら、普通の動物に負ける生き物なんです。ですから、常に最後までありとあらゆる問題について「考える、考える、考える」ということが必要なのに、先程あったように、何か動きがあった時に途中で考えるのも面倒くさいからやめて「まあいいや。これで行きましょう」というふうになったら、そこで人間の持っている最後のそして最大の“強さ”を放棄するということになると思うんです。そういうことがないように、どんな問題があっても、人間は最後まで“考える”ということを忘れないで、いわゆる“思考停止”、“思考の放棄”、そういうことがないといいと思います。思考停止の最大の悲劇の一つが、特攻の問題ではないかなというふうに思います。



※映像（開始点 41 分 00 秒）とあわせてご覧ください。

アメリカと戦っていて、もう絶対に勝つ見込みがないという段階を超えた時に、本当だったら「もう負けました」と言って、終戦を、講和を申し出るしかないんです。本当はね。ところが、そこに思考が行かない。「戦争は終わるまで戦うんだ」ということで、考えることをやめてしまっている瞬間がある。そのためにどうしたか。普通の兵器で、普通に戦って勝てない。それならば、人間が爆弾を持って体当りすれば、百発百中じゃないかと。これ自身、全然間違っているんですけれど、そういうようなところへ行ってしまったというのが、日本の誤った、また足りなかったところではないかなと思います。偉い人がそういうふうになると、国の将来を誤る。そして末端の兵士のレベルでそうなると、今度は自分の将来を誤る。失うことになるんです。

ロシアによるウクライナへの軍事侵攻は、いまだに戦闘が続いている。ロシア国内では反戦や政権批判の声に対して厳しい言論統制が行われ、軍事侵攻開始以降、延べ約２万人が拘束された(OVD-Info 調べ)。兵役を逃れるため、国外へ脱出をする人たちもいた。

今の戦争ですと、特に国境が接していると、戦争には加担したくないと思って国境を越えて脱出する人もあるかもしれない。国内で反戦運動をすれば、当然ながら逮捕されて犯罪者になってしまう。そういう状況の中で、どのようにしていったらいいかという本当に難しい選択に迫られた時に、何度も何度も考え直さないといけない問題になっていくんだと思います。そこで「反対してもしようがない。言われたとおりやりましょう」という単純な考えに陥ってしまうのは、本当に良くないのではないかと思います。

軍隊というのは本当に難しくて、なくてはいけない面もあるんです。純粋な“防衛戦争”というものがあります。でも、これをコントロールすることの難しさというのがあるんです。実際によく言われるのが「戦争をなくすことはできるでしょうか」というのがあるんですけれど･･･生き物というのは闘争して生き残るんですね。ですから、人類も生物も発生してからずっと戦って戦って、他の動物や他の植物の命をいただいて生き残るわけです。ですから、戦争というのは生き物にとってなくなるものではないと思うんです。ただ現実にはなくすことはできなくても、限りなく減らしていくことができると考えて努力するのが、現実的な考え方ではないかと思います。

いま私が、世の中がちょっとおかしいなと思うのは「自分の意見が正しいと思った人は、他の意見は全部間違っていると思う傾向がある」ということです。それが衝突を生む。「自分の考えは、自分にとって正しい。違う人が違うことを考えていても、その人にとっては正しいんだ」というフレキシブルな考え方、そういう緩やかな考え方というのが失われて、一つが正しいと他は間違っているというふうな世の中になるから、ギスギスした闘争が起きるのではないかと私は思うんです。

ちょっと話が大きくなるんですけれど、根本は「教育」だと思うんです。戦後の教育はずっと技術教育を非常に重視した。技術教育の理屈上のシンボルは「数学」になるわけですけれども、これは答えが 100 の中に一つあって、一つの答えが正解ならば他は全部間違いなわけです。こういう教育が、緩やかな関係というのを失わせているんじゃないか。これは“客観教育”の一種の弊害なんですけれども･･･。

私が受けた美術教育というのはそうではないんですね。“主観教育”である美術教育というのは、100 人の人間が同じモデルを描いたとすると、100 の答えが出るんです。絵は 100 ないといけない。同じ絵を描いた人がいたらすぐ捕まって「君、まねしただろう」と言って叱られるわけです。つまり主観教育というのは、すべての人間はそれぞれの考えを持っているし、持っていなければいけない。ということは「自分の考えと、他の 99 人が違う考えを持っていて当然だ」という考えなんです。そういった考えをもう少しきちんとした形でみんなが共有することができれば、自分の考えと違う人がいても当然だし、もしそこで考えの衝突があっても、お互い相談をしながらその妥協点を探すことができるのではないか。妥協がなければ、いつまでたっても衝突のままです。

これは両方大切なんです。技術と文化、文化的というか芸術的な考え方。これは両方とも大切ですけれども、どちらかだけになると、やはり間違いが発生するんです。ですから私は、主観的な個々の人間、多様性を認める教育がもう少し多くないと、世の中から衝突が減らないというふうに思うんです。

第二次大戦以降、大きな対外戦争を全く起こしていないのは事実上、日本だけです。これは日本が、日本の政府と日本人が、戦争の惨禍を身にしみて反省したために、何とかかろうじて達成したことなんです。易しかったわけではないんです。易しいからできる、易しくないからできないという問題ではなくて、戦後 80 年をさらに 100 年にして、100 年を 200 年にというふうに、頑張って伸ばしていかなければいけない。そういう問題を深く考えて実行していくことが大切だと思うんです。

私は昭和 23 年、戦争直後に生まれているんですね。ですから、戦争を全く知らずに幸せに育ったわけです。今 75 歳になりまして、自分でちょっとおじいさんぶりを楽しんでおるんですけれども、私は平和な時代に生まれて平和な時代のままに死んでいく、最初の世代になりたい。そういうふうに思っています。

<Q&A パート②>

戸髙さん「では、東京のさはしさん。いかがですか」

さはしさん「お話の中で、戦争やそれ以外のことでも、お互い話し合っていく中で妥協点を見つけていくことが大事だというふうにおっしゃっていたと思うんですけれども、戸髙さんご自身の個人的な問題でもいいですし、他者との問題でもいいんですけれども、どういったところまで踏み込んで妥協していくか、もう少し詳しくいただければと思います」

戸髙さん「これは状況で非常に幅があると思うんですけれども、無理な妥協は続かないですから、例えば２つの意見がぶつかった時には、両方で妥協を出し合いながら落としどころを探すという妥協のノウハウですね、そういったところの研究や考え方が、もう少し広く認知されるべきだというふうには思うわけです。ですから、例えばいきなり限界まで両方が妥協点を提示するということはないと思います。交渉というのは両方が納得できるところを探り合うというものなので、片方が自分の意見を全部通すというわけではないです。自分はこのぐらいは妥協できる、そちらはどのぐらい妥協できるんだろう。そういう考え方の交渉というものが、平和的な交渉をつくれるのではないかと思います。

私はどちらかというと人間が極めて妥協的なんで、五分五分よりもちょっと低くてもいいかなと。ただ自分としてはこれは譲れないというラインはみんなあるわけですね。ですから、そういうところをお互いに認識し合って、意見の違いを調整する。そういう考え方が定着した社会というのは非常に和やかで温かい社会になるのではないかと思います」

えいとさん「なぜ戦争がこの世からなくらないのかという答えの一つが、信頼関係が築けないということがあるのかと思います。相手はもしかしたらこうしてくるんじゃないかという疑いの心のようなものが、戦争がなくならない原因の一つなのではないかなと僕は考えています。戸髙さんはどういうふうに考えているのかなと思いました」

戸髙さん「戦争というのは、昔はね、それこそローマ時代などは、“産業”としていた国もあるんです。自分のところではものを作らないで、よその国に攻め込んで食べ物でも宝物でもみんな持ってくる。それが国の産業だったりするというとんでもない時代もあったわけですけれど、現代の世界における戦争というのはやはり“利害”なんですね。ですから利害が、例えば条約などで協調的に解決しようとする時に、今おっしゃったように、最後の段階で『裏切られやせんか』とか『不平等な条件を押しつけられているのではないか』という猜疑心(さいぎしん)で、お互いの安心感が最後までなくて、疑心暗鬼の中で衝突するということがあると思うんで

す。一方的に信頼して裏切られるということも当然あると思うんですけれども、こればかりは相手を信じるところからスタートしないと話が進まない。難しいですけれども、やはり実際に平和な結果を維持するという努力を互いにするんでしょうね。それを解決するのは、やはり最後は人間の“考える力”だと思います」

rock さん「戦争の一つのファクターとして、私は、人の“恨み”があると思っています。日本も、日露戦争の仲介に入ったアメリカが、結局は、勝ったと思っている日本に、領土もない、賠償金もない。あの当時、日本人は相当恨んだというのは、本に書いていらっしゃったんじゃないかと思うんですが･･･それが結局、アメリカとの戦いに走らせた。今のプーチン大統領も、ソ連の消滅はアメリカと NATO のせいだと思っている。そういう恨みがずっとあるんじゃないか、非常に難しいと思っています。その辺の御見解をちょっとお聞かせください」

戸髙さん「まず日露戦争の結果ですね。日露戦争は、日本は事実上、継戦能力がもうまったくない状況で、あそこで講和できなければ、もう一海戦やったら、負けるのが決定するぐらいの国力だったわけです。ところがたまたま勝ったために、そういうことを国民に知らせないで、見事に勝った話ばかり残すんですね。もし、しばらくして『ぎりぎりだったんだ。あれで講和できなかったら日本は大変なことになったんだ』ということをきちんと教えていれば、取れるはずの賠償金が取れなかった、頭にきたというような意識が残ることはなかったわけなんです。ですから、それも正しい情報を与えなかったための錯誤というか失敗なわけですよね。

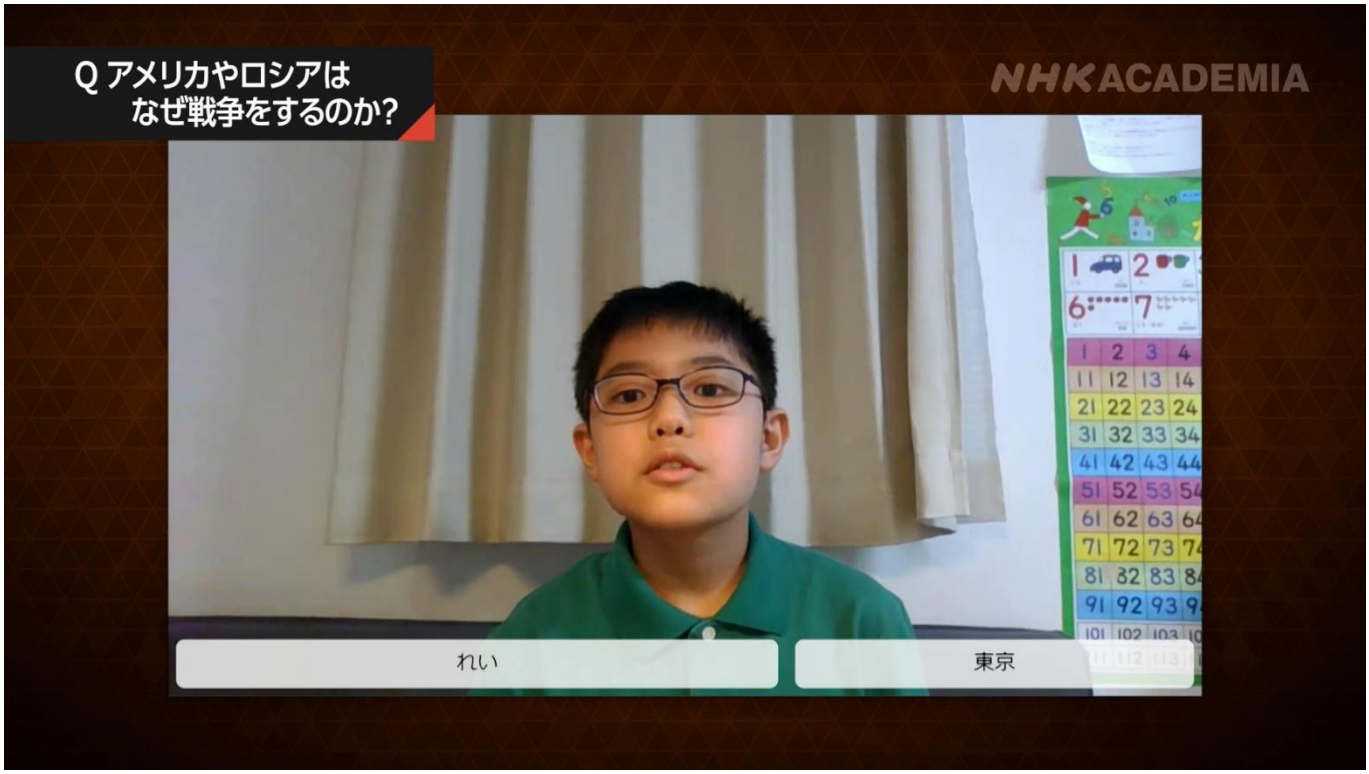
ですから、ロシアになって失ったものを取り返したいというような、あのときの悔しさを取り返したいというような気持ちが根底にあるということは考えられるんですけれども、これも『なぜソビエトが崩壊したか』というようなこと、国内事情がきちんと国民に伝わっていれば、これはやむを得なかったんだと、納得というものができたんだと思います。これもやはり政府がちゃんとそれを伝えない。自分に都合の悪いものはあまりきちんと伝えないというような状況があって、どこかに鬱々としたものが残ったんでしょうね。やはり“恨み”のようなものというのは、当然個人にも国にもあるんでしょうけれども、それはやはり先ほど言ったように『正しい情報を正しく伝える』ということがないところに、ゆがみが出るんだと思います。これは本当に大切なこ

とだと思います」

みやさん「私は戦争や差別、偏見を考える時に、人が人ではなくて、人が物になっていると思う時がよくあります。それと、私は香川の人間なので、特攻機『桜花』の設計者が香川の出身の方だと知った時はショックでした。それもかなり年をとってから、30 歳か 40 歳になってから知りました。なぜこれを誰も教えてくれなかったのかなと、やはり知ることが大切だと思います。あと今日紹介してくださった録音のことなんですけれども、それをどこかで聞ける場所がほしいなと思いました」

戸髙さん「本当にその通りだと思います。やはりまず戦争はなくならないけれど、人間の知恵というものは限りなくそれを減らすことはできるだろう。そして、『桜花』のことを最近まで知らなくてなぜ教えてくれなかったんだろうというお話がありましたけれど、まことにその通りです。やはりすべての判断というのは、情報があって判断できるので、情報がなければ判断できないんですよね。そして『正しい情報しか正しい答えは導けない』わけです。間違った情報からは間違った答えしか出ない。そういうことを考えると、どんなこともきちんと伝えないといけないというふうに思います」

戸髙さん「特に特攻機『桜花』は、私は縁があって、パイロットだった人にも会ったことがあってお話もたくさん聞きましたし、設計した人の関係も聞きました。ですからそういった意味で、ありとあらゆるもの、そして先ほどおっしゃったこのテープの声も、どこかの段階できちんとした歴史史料として、研究者また興味のある人がみんな聞けるような環境をつくっていくというのは大切だと思っています」



れいさん「日本は第二次世界大戦が終わってから戦争をしていないですけれど、アメリカやロシアの戦勝国はどうして戦争をするんですか？」

戸高さん「本当にね、私も聞きたいぐらいですけれども、やはり自分の“権利”や“利益”というものを真っ先に考え過ぎるんですね。例えば、戦前の日本も物資がなかった。戦争前に日本でたくさん出た本をいろいろ見ると、『日本には物資はないけれども、例えば南方に行けば、ここの島にはこんな物資がある。あそこの島にはこんな物資がある。こういうものがあればいい。取ればいいじゃないか』というふうなことを、平気で書いている本がたくさん出ているわけです。ところが、それは“よその国”なんですよね。例えばロシアなども、今回ウクライナを自分の国にしたい、昔自分の国だったんだからまた取り返そうというふうな考え方。アメリカの場合にはいろんな戦争があると、“アメリカの正義感”に基づいて介入して戦争して、自分が平和にしてあげようという気持ちが戦争を起こしているわけなんですね。ですから、戦争というのはいろんな理由で起こるので、簡単には割り切れないんですけれども、『戦争をして、解決できることはない』と思わないといけないと思いますね。

ですから、戦後、いろんな国が戦争をしていますけれど、それはやはり偏った『自分たちの考えが正しい、相手は間違っている』という前提で起こしてしまうというところに原因が一番あるので、一歩下がって、『相手にも相手の考えがある』ということを考えてあげれば、もう少し全体の紛争の数は減ったというふうには思います」

れいさん「歴史の勉強をしている時に、湾岸戦争などをなぜやるのかという疑問があったんですけれど、今回、その質問ができて、その疑問がなくなったので良かったです。ありがとうございました」

戸高さん「こういうことは、『ああ、これでわかった』と思っちゃいけないんです。『ずっとわからないんだ』というふうに考えながら、“考える”ということを続けるということが大切だと思います。『どうしてなんだということを絶えず考え続ける』ということそのものに、価値があるというふうに考えた方がいいですね」

戦争に限らず、歴史というのは伝えられること。人間が持っている最も大事な能力の一つは、自分の体験を伝えられる、受け取った体験を次の世代に伝えられる、こういうことだと思うんですね。だから、人間は知識の

蓄積ができるわけです。ですから、特にあってはならない戦争の経験を伝える時、どうしたら伝わるのか。ちょっと前までは、実際に本当に苦労して経験を持った人の話を直接聞くことができたんですけれども、もう事実上できないんですね。

そして、私が唯一気をつけないといけないと思うのは、いろいろ勉強して戦争の悲惨さを「わかった」と思ったら、やはりそれも違うんですね。本当にわかったと思うことは、私たちにはできないんです。本当に戦争の中で理不尽な死を迎えた人は、そこで死んでいるわけですから。戦争で苦労した体験を語る方、本当に貴重な体験を聞かせてもらうことができるんですけれども、苦労した大変だったと言えるということは、本当に幸運をつかんで生き残った人が言えるんです。本当にその場で悲惨な目に遭った人は、そこで亡くなっているんです。「本当に幸運をつかんで生き残った方の話しか聞けていない」んだということをまず理解しなければいけない。「どんな悲惨な話を聞いても、実際はもっと悲惨なんだ」ということを知らなければいけない。ですから、簡単に「ああそうなんだ。大変なんだ」というふうに簡単にわからないで、「もっともっと大変なんだ」ということを、いろいろ勉強して知っていかなければいけない。これが歴史理解の一つの難しさであり、必要なところだと思います。

私たち戦後世代がきちんと戦争の悲惨さを知って伝えられるようになった時に、先程言ったような日本の 80 年の平和が 100 年になり 200 年なる。一つのステップになるんだというふうに思っています。どうもありがとうございました。